

長崎来航唐船主による書法受容の一形態

松 浦 章

A form of acceptance of calligraphy by a Nagasaki visiting Chinese Junk merchant during the Edo period

MATSUURA Akira

Abstract: The exchange between Japan and China during the Edo period was centered on Nagasaki. This exchange continued until the end of the Edo period. It was facilitated by the cargo trade brought by the so-called Chinese ships that docked in Nagasaki from China. Some of the Chuanzhu (supercargo Chinese Junk merchants) and the crew members of the Chinese Junks were familiar with Chinese calligraphy, and some Japanese liked their calligraphy.

This study describes a part of the acceptance of Japanese calligraphy by the handwriting of the Chuanzhu [Editor17] who visited Nagasaki during the Edo period, which has been explored so far.

キーワード：江戸時代 (Edo Period)、唐船 (Chinese Junk)、船主 (Chuanzhu
【Supercargo】)、書法 (Calligraphy)、受容 (Acceptance)

1 緒言

江戸時代において日本はいわゆる「鎖国」政策をとり、対外関係の中心は長崎と対馬であった。長崎には歐洲のオランダ船と中国からの貿易船いわゆる“唐船”が来航し¹⁾、対馬からは朝鮮国の釜山へ対馬宗氏の使節が訪れ通交が行われた。²⁾

このような中でも、制限されていたが外国人との接触が可能であったのが、長崎における中国人いわゆる“唐人”との接触であった。日本の知識人の中には、伝統的に漢学を好む者が多く、長崎での唐人との接触を希求するものが多かった。

そのような唐人との接触で受容した中国文化の中に中国の書法があり、それに強い関心を持つものもあり、長崎に来航した唐船の船主等の中国人に中国書法を求めたものもいた。

江戸時代はそれ以前の戦乱が終始し、比較的安定した平和な時代が継続したこともあり、多くの人々が教養に教育に感心が高まり、書道の分野でも伝統的な日本の書道に対して、中国風の“唐風書道”³⁾の高まりがみられ、中国からもたらされた書道関係の書物⁴⁾や印譜⁵⁾そして清朝で復興した篆書の書法⁶⁾など多くの人々の関心を引いたのである。

このような状況のもとで、中国から長崎に来航する唐船の船主等が一部の日本人と接触し、書法による交流の記録を残している。そこで、その中国書法の受容の一端について述べるものである。

1) 山脇悌次郎『長崎の唐人貿易』吉川弘文館、1964年4月、1-209頁。

大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』同朋舎出版、1984年6月、21-30頁。

松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』思文閣出版、2007年7月、11-16頁。

2) 田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』創文社、1981年2月第一刷、1987年10第二刷、37-57頁。

3) 中田勇次郎「江戸時代の唐様と貫名菴翁」、『墨美』第173号、1967年10月、2-5頁。

4) 大庭脩『江戸時代における中国文化受容の研究』同朋舎出版、406-420頁。

馬成芬『唐船法帖の研究』清文堂、2017年4月、1-198頁。

5) 李寧『中国篆刻对江戸時代日本篆刻の影響研究』関西大学博士（文化交渉学）学位論文、2017年3月。

李寧「高芙蓉と江戸時代における舶載書法篆刻資料：複製された『古今公私印記』を中心として」『東アジア文化交渉研究』9号、2016年3月、117-139頁。

6) 曹悦「中国篆書书法对日本的影响与普及——以城戸恒《书谭》为中心」『東アジア文化交渉研究』第10号、2016年11月、607-704頁。

曹悦「中国篆書书法與江戸日本」、松浦章編『近代東亞海域交流：外交・貿易・物流』台湾・博揚文化出版事業、2017年11月、148-189頁。

曹悦「江戸時代における日本の篆書書法の受容状況について——江戸・大坂出版書目を中心に——」『東アジア文化交渉研究』第12号、2019年3月、81-101頁。

2 江戸時代に長崎に来航した中国僧侶による中国式書法

明末中国の争乱の影響を受けて、中国の僧侶等が長崎に来航し、中国仏教の伝来のみならず、中国書法も伝えている。

徳川家綱が承應元年（1652）に、中国仏教の將來を考えていたようである。

嚴有院様（四代將軍徳川家綱）御在世之時、承應元年、古昔足利家ノ例ニ準セラレ、日域ニ禪刹一字被創建、唐國ヨリ道德優良ノ僧ヲ可令住持旨上意有之。⁷⁾

と、徳川第四代將軍家綱⁸⁾の命により禪刹一字を創建するために、唐國より道德優良の僧侶を招聘することとなった。

これによって、中国福建省の福州府にある黄檗山の住持隱元隆琦（1592-1673）が招聘されるのである。⁹⁾ 隱元隆琦は日本からの招聘により承應三年（1654）六月に厦門を出帆して七月に長崎に到着し、長崎の興福寺に入っている。¹⁰⁾

『徳川實紀 嚴有院殿御實紀』承應三年八月朔日の條に、

けふ長崎奉行より唐土黄檗山現住の僧隱元、弘法のためとて去月五日渡海して到着す。¹¹⁾

と記されるように、承應三年五月に日本へ向けて渡海したのであった。

徳川幕府にとっても注目すべき出来事であった。同書、承應三年九月五日の條に次のように記されている。

唐僧隱元徒弟六人引つれ、長崎の地に來舶せるをもて、其さま問はせられしに、かの國の亂を避て歸化せるにまぎれなければとて、奉行よりその法語を進覽す。よて井伊掃部頭直

7) 『長崎實録大成』第5巻、「黄檗唐僧歴任之畧記」、丹羽漢吉・森永種夫校訂『長崎文献叢書第一集・第二巻長崎實録大成正編』長崎文献社、1973年12月、117頁。

8) 大石学編『徳川歴代将軍事典』吉川弘文館、2013年9月、239-240頁。

9) 『長崎實録大成』第5巻、「黄檗唐僧歴任之畧記」、丹羽漢吉・森永種夫校訂『長崎文献叢書第一集・第二巻長崎實録大成正編』長崎文献社、1973年12月、117頁。

10) 大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編『黄檗文化人名辞典』思文閣出版、1988年12月、21-23頁。

11) 黒板勝美・國史大系編修會編『徳川實紀 第四編』吉川弘文館、1981年11月、119頁。

孝、保科肥後正之まうのぼり、林道春信勝にこれをよましめ、御聞に備ふ。¹²⁾

長崎奉行から江戸の幕府政庁に届けられた隠元の「法語」を林道春信勝こと林羅山¹³⁾の翻譯によって聞いたようである。その席に同席したのが、家綱の補佐として重職にあった井伊直孝と保科正之¹⁴⁾であった。将軍家綱にとって極めて異例なことであったようである。

その後、隠元は江戸へ招聘され、徳川家綱と面談している。『嚴有院殿御實紀』巻十六、萬治元年（康熙12, 1658）九月十七日の條に、隠元の江戸到着を記す。

これより先唐僧隠元、摂津國富田普門寺に留錫せしが府にまいり、けふ天澤寺にいたる、よて松平伊豆守信綱慰勞の御使し、寺社奉行井上河内守政利そひたり。¹⁵⁾

隠元は来日後、しばらくして摂津國富田の普門寺、「慈雲山と號し、臨齋宗妙心寺派龍安寺末にして」¹⁶⁾とあり、すなわち現在の大阪府高槻市富田にある臨濟宗の普門寺に滞在していた。普門寺はほんらい臨濟宗の寺院であったが、隠元が滞在した時期に黄檗宗に改宗するも、隠元が退去した後に再び臨濟宗にもどった。¹⁷⁾幕府からの招請により隠元は江戸に赴き、神田湯島の天澤寺に滞在した。天澤寺は徳川家光の乳母であった春日局が埋葬された寺である。¹⁸⁾隠元の来府に際して老中松平信綱からの使者や、寺社奉行井上政利が直接接待するなどその厚遇さが知られる。そして家綱との面談となったのは十一月朔日であった。

隠元このほど湯島天澤寺に寄寓しけるが、けふ召に應ず。普門寺龍溪、妙心寺翁陪從し、通詞一人後に隨行す。隠元大廣間の次に侍ふ時、執政の人々出て通詞に仰を傳ふ。此とき寺社奉行先達て御前に出る。隠元黄衣を着し、左に座具念珠、右に拂子を手にし、闕の内に入て拜し奉る。欄縋二卷、線香百本、唐墨十六挺獻じ奉る。次に龍溪進拜し、黄檗和尚華語録六冊、隠元扶桑語録五冊、并に唐扇二本獻じ、禿翁は相原一束捧し退く。¹⁹⁾

12) 黒板勝美・國史大系編修會編『徳川實紀 第四編』122頁。

13) 三省堂編修所編『コンサイス人名辞典——日本編——』三省堂、1979年3月、909頁。

14) 三省堂編修所編『コンサイス人名辞典——日本編——』67、1003頁。

15) 黒板勝美・國史大系編修會編『徳川實紀 第四編』281頁。

16) 赤松吉雄編『富田町誌』富田町役場、1937年8月、371頁。

17) 『日本城郭大系』第12巻、新人物往来社、1981年3月、70頁。

18) 『柳営婦女伝』巻八、『徳川諸家系譜』一、続群書類従完成会、1970年7月、189頁。

19) 黒板勝美・國史大系編修會編『徳川實紀 第四編』284頁。

隠元が家綱に拝謁した情景が具体的に記されている。隠元に従ったのは摂津富田の普門寺の龍溪と妙心寺翁陪であった。

江戸に滞在した隠元は、十一月二十一日に、

唐僧隠元摂州富田へ留錫すべしと命じられ、銀百枚、時服十給はり、龍溪、禿翁にも時服下さる。²⁰⁾

とあるように、摂津富田への帰郷を許されている。

隠元の来日は、日本に黄檗宗の宗風が伝来する契機となった。日本には宋代に伝来した臨済宗の各派が鎌倉時代から室町時代中期において、宋や元時代の中国風の禅宗を受容していたが、隠元の来日によって黄檗宗が日本に伝来することになる。さらに隠元の他にも多くの僧侶が来日した。その中でも中国書法に造詣の深い僧侶を幾人か掲げたい。

中国南明の永暦七年（1650）に長崎に来航し、その後、隠元に乞い僧となった独立性易（1596-1672）は、道号獨立、法諱性易、俗姓戴、幼名觀胤、後に名を笠、字を曼公と改めているが、杭州仁和縣人の人で、隠元から得度を受け、臨済宗黄檗派の僧侶となるが、医術、書、畫、篆刻に優れ、彼の書法は日本における唐様流行の基となったとされる。²¹⁾ 獨立は篆刻にもすぐれとりわけ篆刻は中井敬所の『日本印人伝』に東皐心越（1639-1696）が「我邦篆刻之技、得獨立心越而始明矣」とされる。

木庵性瑫（1611-1684）は、江戸時代前期に明国から渡来した臨済宗黄檗派（黄檗宗）の僧。俗姓は呉氏。福建省泉州府晋江県の出身。勅諡号は慧明国師。明暦元年（1655）に来日した。能書家としても知られ、その書風は中国人ならではのものがあり、隠元、即非とともに黄檗三筆と称されている。²²⁾ 三人には共通した書風があり、隠元の「穩健高尚な書」、木庵の「雄健円成の書」、即非の「奔放闊達な書」と評され「唐風」あるいは「黄檗風の書」として珍重されている。

即非如一（1616-1671）は、江戸時代前期中国から渡来した臨済宗黄檗派（黄檗宗）の僧であり、福建省福州府福清県の出身であった。俗姓は林氏。字は即非。明暦三年（1657）に長崎に来航した。能書家とし知られ、とくに楷書・行書が優れ、隠元隆琦、木庵性瑫とともに黄檗の

20) 黒板勝美・國史大系編修會編『徳川實紀 第四編』、286頁。

21) 大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編『黄檗文化人名辞典』283-284頁。

22) 大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編『黄檗文化人名辞典』353-355頁。

三筆と称される。²³⁾

東皐心越（1639-1695）は、道号心越、法諱興儔、号東皐、浙江金華府の人、俗姓は蒋氏、名は初め兆隱のちに興儔、心越は字、東皐は号であり、別号に樵雲・越道人がある。延寶五年に（1677）来日している。詩文・書画・篆刻など中国の文人文化、とりわけ文人の楽器である古琴を日本に伝え、日本の琴楽の中興の祖とされる。また独立性易とともに日本篆刻の祖とされる。²⁴⁾

これら江戸初期の渡来僧侶により、中国の黄檗宗が伝えられるとともに、彼等が中国で培ってきた中国風の書法や印刻法すなわち篆刻も伝来したのである。

その後、享保年間までしばしば渡来僧侶がみられたが、その後はほとんど来日は絶えてしまう。その後は、毎年定期的に来航する唐船の乗員のみとなり、彼等との交流が後述のように断片的に見られるのである。

3 江戸時代長崎来航の唐船主の書法

清代乾隆中期以降になると唐船の荷主は長崎に来航することはほとんど無くなり、荷主に替わって船主が交易の責任者として来航した。船主は荷主に替わって長崎での交易の全責任者として取引をおこなったのである。そのため荷主は船主を信頼できる血縁者やその信任のおける雇用者であった。船主は貿易全般の業務をおこなうのみで、唐船の航行にはその責任を負う船長や乗組員の総監督的な総官などがいた。²⁵⁾

乾隆中後期以降になると毎年10～13艘の唐船が長崎に入港した。その乗員は、唐船の航行中に祭祀している船神“媽祖神”を長崎港に停泊中は、長崎の興福寺、崇福寺などの“唐寺”に預けて祭祀を委託²⁶⁾し、乗員達は元禄二年（康熙28、1689）以降から幕末まで、日本側が造成した長崎の唐人屋敷、中国人達が“唐館”と呼称した區劃で滞在期間を過ごしたのであった。

この時期の唐船は一隻に60-100人ほどの中国人が搭乗していたので、乾隆中期になると、毎年600から1,000以上の中国人が長崎に来航し、3箇月から5箇月ほど滞留在して貿易を終えて帰国した。その滞在期間中に一部の船主等が日本人と接触する機会を得たのであった。

23) 大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編『黄檗文化人名辞典』190-192頁。

24) 大槻幹郎・加藤正俊・林雪光編『黄檗文化人名辞典』162-163頁。

25) 松浦章『清代海外貿易史の研究』朋友書店、2002年1月、58-97頁。

松浦章著・李小林譯『清代海外貿易史研究』上（上・下）冊、天津人民出版社、2016年5月、51-91頁。

26) 松浦章「江戸時代長崎来航の唐船と菩薩揚」、井上克人編『近世近代日中文化交渉の諸相』関西大学東西学術研究所研究叢書第4号、ユニウス、2017年3月、3-25頁。

A) 天明期の長崎来航唐人の書法

長崎を訪れた江戸時代の人々の中に様々な記録を残している。公用で長崎を訪れた現在の茨城県にはほぼ相当する水戸藩の長久保赤水が、その紀行日記の『長崎行役日記』明和四（乾隆32、1767）年十月十四日の條に、次のように記している。

…十禅寺の唐人館へ行く。²⁷⁾…其時に唐人ども十人ばかり此邊に徘徊して相共に笑語す、唐音に中に和語を用うる者もあり、人物賤しからず。面體この方の人にかはらず。²⁸⁾…案内の通事人高尾嘉左衛門、その子兵右衛門、華語にて唐人とかたる。即ち茶を淹していだす。味ひははなはだ淡薄なり、饅頭、カステラ、荔枝、龍眼肉等の菓子を案に盛りて三十膳ほど座敷の中央にならべおく、彼國の風と見えたり。…²⁹⁾

唐人どもの給仕にて我等まで賞味す。游樸庵か學才かねて聞けども、ゆるしなれば臂を交へて筆談する事を得ず、唯目禮して退く、悵悵に堪えたり。

長久保赤水は、唐人屋敷の付近まで来て、そこで長崎に来航した中国の人々の姿を見た。中国語で談話する者もいたが、なかには日本語を使って話す人も見掛けている。そこで長崎で唐人の通訳をつとめる唐通事の高雄嘉左衛門とその子供の兵右衛門を通じて懇談を行い、茶菓などの接待を受けたのであった。とりわけこの時に来航していた游樸庵との面談を臨んだが、簡単にはできなかった。

游樸庵は次頁図³⁰⁾は「姓游、名勲、字元周、古閩人、福州船商主。游樸庵は、『元明清書画人名録』には、「游勲 ユウクン 字元周、一字樸庵、古閩人。行草」と見られ、本姓は游勲であった。長崎来航の船主は、日本では一般に本姓は使用せず字や号を用いていたことが多かったため、本貫すなわち本籍を特定するのが不明なものたちがほとんどである。

游樸庵の長崎来航が記録された最初は、明和二年（乾隆30、1765）の西八番船主より安永三年（乾隆39、1774）午四番船主までに及びその来航期間は10年間に及んでいる。³¹⁾

游樸庵は、長久保赤水がまとめて『清槎唱和集』につぎの文章を残している。

27) 博文館編『紀行文集』帝国文庫第22篇、博文館、1930年10月、240頁

28) 博文館編『紀行文集』240頁。

29) 博文館編『紀行文集』240-241頁。

30) 博文館編『紀行文集』240頁。

31) 松浦章『江戸時代唐船による日中文化交流』153-154頁。

謹答赤水長先生執事、僕生中国、長客瓊江、嗜訪名人、好交高士、凡東海之名士先生、雖不能面談促膝、亦差可已諾通情、椰心猶未足也。

長久保赤水はもう一人の船主についても記録している。右図の龔廷賢³²⁾、字克顛、溫陵人龔廷賢は、『元明清書画人名録』に「龔標 キヨウヘウ 字克賢、溫陵人。行書」とある龔標のことであろう。来航船主として龔克顛の名で知られるのは、明和三年（乾隆31、1766）戌12番船主と明和四年（乾隆32、1767）亥5番船主とある二度だけである。

長久保赤水『長崎行役日記』明和四（乾隆32、1767）年十月十四日の條に次の記述が見られる。

福州の一番船、長さ二十五間、横五間、帆柱三十五間、廻り四圍。舳に獅子の頭を畫き、艫に寶徳の二字を金字に置く、上に鳥と人と雲とをゑがく。惣て黑色瀝青塗なり。帆は笹帆とて竹のあじろに作る。南京、福州の船、年々十五艘まで入津を許す。是を番船といふ。この方の二、三百石積の船十五艘ほどに積む荷物を、唯一艘につみ來ると云ふ。舳の舵をかける處より梯にて乗りしばらく見物す。³³⁾



長久保赤水「長崎行役日記」より



長久保赤水「長崎行役日記」より

福建の福州から来航した唐船が一番船として番立てされていた。船尾の名前から寶徳號と思われる。長さが「二十五間」、一間を6尺約1.8mとして約45mあり、幅が「五間」約9mの大きさの船であった。この頃、毎年これくらいの規模の唐船が15艘ほど長崎に来航していた。

長久保赤水『長崎行役日記』明和四年（乾隆32、1767）十月十五日の條には、長崎市中の書店に赴いた時の様子が見られる。

32) 博文館編『紀行文集』240頁。

33) 博文館編『紀行文集』241頁。

櫻町の中、唐物屋某、唐本多く貯へ置く由、祐介を伴ひ、種々の墨本をみる。二王（王羲之・王獻之）、虞世南、歐陽脩、褚遂良、張旭、顔真卿、懷素、柳公權、東坡、元章（米芾）、松雪（趙孟頫）、其昌（董其昌）、允明（祝允明）、徵仲（文徵明）等、みな正面摺にて蟲む處を補ひ、裱帙を飾りて甚だ高價なり。その外唐本數多し。このとき祐介挈鞋の僕となりて末席にゐるを呼出して、草書の墨本を読ませければ、傍人ども皆聳動して是をみる。唐本の中にて四書五經集注巾箱本にて六帙なるを買ふ。³⁴⁾

長崎の唐物店すなわち中国からの輸入品を扱う店で、各種の書籍を見たのである。拓本や法帖などさまざまなものがあり、有名な王羲之、王獻之から始まり唐代の名筆や明代のものまで著名な作者のものが並んでいた。とりわけ草書の書跡を従者に読ませたところ即時に解説し、周囲の人々を驚かせたようである。長久保赤水は輸入書籍の唐本の中から四書五經集注を購入している。

B) 天明期の長崎来航唐人の書法

長久保赤水から二十年後に長崎を訪れた江戸の画家司馬江漢の旅行記に長崎の様子が次のように記される。司馬江漢『江漢西遊日記』天明戊申（8、乾隆53、1788）十月二十二日條に、

唐人、今渡海する船は私にする商人なり、皆蘇州と云う處より來る。則ち蘇州は日本の大坂の如し。南京第一繁昌の地なり。王命にて渡海する者、昔は范氏なり、中頃にては王氏來る、今は錢氏なり。外に十二家とて、是は自己一己の商いに交易するなり。其船五、六艘來るなり。日本より交易の代物は銅十萬斤を高とす。彼國より持ち渡る物、廣東邊の產物、藥種、砂糖類なり。また金銀をも持ち渡る。程赤城は十五年此方渡海すと云ふ。³⁵⁾

このころ長崎に来航する唐船の荷主は、「王命にて渡海する」とある清朝の官商の差配する唐船と、「十二家とて」とある民商の唐船とがあった。³⁶⁾ 当時各船は日本から中国へ輸入する日本產の銅、中国で言う「洋銅」を目的に来航し、毎船十萬斤約60tonの銅を購入して帰国した、中

34) 博文館編『紀行文集』242頁。

35) 與謝野寛・正宗敦夫・與謝野晶子編『江漢西遊日記』日本古典全集第二期、日本古典全集刊行會、1927年8月、99頁。

36) 松浦章『清代海外貿易史の研究』144-167頁。

松浦章著・李小林譯『清代海外貿易史研究』上冊、135-160頁。

国からは廣東産の産物や漢方薬剤、砂糖などが輸入され、金銀も日本へもたらした。唐船の船主の中には程赤城はこの時点で十五年も中日間を往来している商人であった。

ついで『江漢西遊日記』天明戊申（8、乾隆53、1788）十月二十八日條に、

稲佐悟眞寺へ唐人六十人程佛參す。…唐人、下官の者多し、其内善き人は十人、之を船頭と呼ぶ、宋敬庭と云ふ人に知己に成る。是は五十位に見え、鬚少々あり。其餘鬚無し、また西湖と云ふ人は四十位にして、是れは肥えたる人なり。顔色利口相に見ゆ。予が製する銅版畫の視目鏡を見せれば、皆皆感心する、シッポコ臺、四人詰にて吾も共に食ひけり。³⁷⁾

とあり、稲佐悟眞寺へ詣でた唐人と接触した江漢が、その唐人の様子を記した。その中の唐船船頭すなわち船主の宋敬庭には好印象を持ったようである。彼等に江漢が製作した銅版画を見せたところ皆が驚いたと記しているところから、江漢も得意であったろう。

その江漢が好印象を抱いた宋敬庭は長崎への唐船主としてしばしば来航している。また西湖と江漢が記したのは費晴湖であろう。費晴湖も同じ頃に長崎にしばしば来航した。その費晴湖と邂逅した日本人がいる。春木南湖（1759-1839）である。彼の旅行記『西游日簿』に「僕、姓春木、名鯤、字子魚、號南湖、別号石石亭。日本勢州長嶋藩侍臣、江府櫻田人也」³⁸⁾とあり、江戸中後期の文人画かとして知られていた。その彼が天明八年九月末に長崎を訪れ、幾人かの唐人と接触し、『西游日簿』に記録されている。その唐人御の一人が費晴湖で、

姓費、名肇陽、字得天、別號晴湖、浙江湖州府居住、苕溪人也。杭州俞鏤生、画人。³⁹⁾

とあり、費晴湖は費肇陽の別號であり、浙江省の湖州府に居住していた。彼の言う苕溪とは、湖州を経て太湖に流入する東苕溪と西苕溪の両河川の下流域を言ったのかも知れない。

十月四日の長崎丸山の井筒屋の唐人の酒宴に同席し、周壬禄と費晴湖とも逢い、そこでの筆談で、周壬禄は次のように記した。

姓周氏、名壬禄、官名恭先、乳名亥生、一字作菴、別字書洗池、號仁山、係浙江湖州府歸

37) 與謝野寛・正宗敦夫・與謝野晶子編『江漢西遊日記』、108頁。

38) 山田清作編『西游日簿』稀書複製會、米山堂、1916年5月、影印部分、3丁裏。

39) 山田清作編『西游日簿』影印部分、2丁裏。

安縣人。⁴⁰⁾

これに対して、春木南湖は、筆談で次のような問いかけを行った。

余 先生 學書何人之風致。

壬 僕初學王右軍石刻、濟習柳宗元、董玄宰（其昌）

余 此便面願賜 妙墨 僕大幸也。

右扇面ニ

僕來日本、幾二十年、遍觀風俗惇然、古風故相交文、及不意今出帆前、又交南湖先生大幸也。

戊申小春五日 周壬祿於井筒屋 印

余 墨華 神妙可賞可商品、…⁴¹⁾

春木南湖は周壬祿が書法に通じている人物として、周がどのように書法を習得したかを問うたところ、周は、最初は王羲之の石刻から学んで後には柳宗元や董玄宰すなわち董其昌（字玄宰）の書法を学んだことを聞き出している。そして南湖が持参した扇に周壬祿に書を依頼し、その書面に感激した。

春木南湖は十月二十三日には唐人屋敷すなわち唐館に到った。

翌廿三日、晴、清川ト同道ニシテ館内到。費晴湖ト旅亭ニ登ル。程赤城ニ逢。⁴²⁾

と記され、その後、筆談が見られる。

余姓程霞生、字赤城、號柏塘、唐山江蘇人也。在此貿易已歷十六年。

鯤（南湖） 先生所學書法何人之風致否。

赤城 字法以王爲宗、而參以趙。

右赤城之樓中ニ而筆語ナリ。⁴³⁾

40) 山田清作編『西游日簿』影印部分、2丁裏。

41) 山田清作編『西游日簿』影印部分、2丁裏～3丁表。

42) 山田清作編『西游日簿』影印部分、15丁裏。

43) 山田清作編『西游日簿』影印部分、15丁裏。

春木南湖は、程赤城の本貫と彼の書法習得の方法を聞き出したのである。程赤城は程霞生と言ひ、赤城は字であり、江蘇省の出身であった。天明八年（1788）の時点で16年もの長崎貿易の実績があったと言うから、安永元年（1772）頃から長崎に来航していたようである。

程赤城の書法の習得方法は、王すなわち王羲之から始まり、趙おそらく南宋から元の書家とも知られた趙孟頫の書法を学んだようである。

C) 寛政・享和時期の長崎来航唐人の書法

上記で触れた宋敬庭や費晴湖が長崎への唐船主として来航した時期は次のようである。

宋敬庭

天明七年（乾隆52、1787）

天明八年（乾隆53、1788）

寛政四年（乾隆57、1792）

寛政六年（乾隆59、1794）

費晴湖

寛政三年（乾隆56、1791）

寛政四年（乾隆57、1792）

寛政六年（乾隆59、1794）

寛政七年（乾隆60、1795）

寛政八年（嘉慶元、1796）⁴⁴⁾

宋敬庭と費晴湖とは、日本の文人達との接触の記録に見られると同時に、天明年間末から寛政年間にかけて、長崎へ来航する唐船之船主として記録されている。

尾張すなわち現在の名古屋の人であった吉田重房、通称菱屋平七の紀行文で享和二年（1802）の序がある『筑紫紀行』の五月十三日の條に、長崎の聖福寺での祭祀後に酒宴があり唐人と同席した時の様子を記している。

通事の伊藤藤九郎及び柳谷氏に陪して、唐の人々と共に卓子につきて飲食す。船主の名は程赤城、潘占萬等なり。…唐人酌を取て、慇にすすむ。酒の力つよく少し苦しみあり。赤

44) 長崎市立博物館編『長崎市立博物館資料目録 文書資料編』長崎市立博物館、1989年3月、252-254頁。



城扇を出し、親ら詩を書いて予に贈る。潘占萬も同しく詩を書いて扇を贈りたり。すべて人物甚柔和温厚に見ゆ。⁴⁵⁾

その光景が早稲田大学図書館所蔵の『筑紫紀行』巻六におさめられた右の図である。唐人が対面する二人に見られて扇面に書を認めている光景である。おそらく程赤城が記している光景であったと思われる。扇面には「信」字が見られる。左手には扇面を授与されたとおもわれる三名の日本人も描かれている。長崎来航の唐船主が文字をしたためている希有の図像である。

ここで登場するのは先に触れた程赤城と潘占萬であるが、潘占萬については唐船主としての記録は見られ無いが、程赤城と同時期に長崎に来航した唐船の財福か総管であった可能性が高い。

D) 文化・文政期の長崎来航唐人の書法

唐醫としても知られる胡兆新は、文化二年（1805）頃に来航していた。大田南畝が文化二年二月二日に唐人屋敷の観劇に招かれた際も、「胡兆新にも杯を伝へし也」⁴⁶⁾と、胡兆新とも杯を交わしている。南畝は書簡の文化二年二月十五日付において胡兆新の書について記している。

唐医胡兆新当春帰国、光軸三枚計り遣し詩を書せ申候、書はことの外見事也。紛々商賈の輩に非ず。左に記す。

45) 博文館編『紀行文集』665頁。

46) 濱田義一郎編『大田南畝全集』第8巻、岩波書店、1986年4月、515頁。

甲子初秋於崎陽旅館雨後聞蟬有感之作

一雨生涼思 羈人感歲華 蟬声初到樹 客夢不離家 海北人情異 江南一路賒
故園鬼女在 夜夜卜燈花

蘇門胡兆新

人説洋中好 我亦試輕游 掛帆初意穩 風急繁心憂 漸漸離山遠 滔滔逐並流
不堪回憶想 鄉思滿腔愁

在乍揚帆離山試筆爲南畝先生雅正 蘇門胡兆新⁴⁷⁾

とあり、また二月二十五日付の書簡にも、

胡兆新も当春は帰国故、絹地二三枚かかせ候処ことの外見事に候。⁴⁸⁾

と認めている。

大田南畝が記すように、胡兆新は唐医⁴⁹⁾として長崎に来航したが、書法に関しても優れた人物であった。唐船主の書法に比べて遙かに優れたものであった。南畝は幕臣として長崎貿易に関与したこともあってか、胡兆新から書を受け取るという機会を得たのであった。

胡兆新の筆跡を確認できる真蹟と思われるものが、京都大学図書館富士川文庫所蔵の『崎館箋臆』⁵⁰⁾との題簽がある書で、「胡兆新対小川文庵等答問」とされ、内題には「胡氏筆語」巻之上に見られるものである。その真蹟とみられる記述は次のようである。「僕三人発江戸時秋仲也、季秋而到于崎、與清客筆語數回、而未有得一善也。萬扇之宝不如一經、雌然



47) 濱田義一郎編『大田南畝全集』第19巻、岩波書店、1989年3月、149頁。

48) 濱田義一郎編『大田南畝全集』第19巻、154頁。

49) 郭秀梅「清医胡兆新の来日記録と業績——長崎における一八〇三～一八〇五年の活動（一）」『日本医史学雑誌』第47巻第1号、2001年3月、83-103頁。

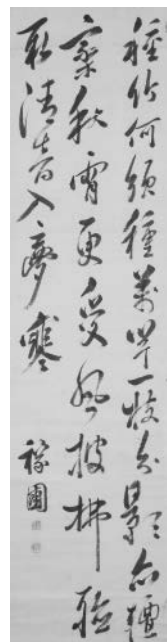
郭秀梅「清医胡兆新の来日記録と業績——長崎における一八〇三～一八〇五年の活動（二）」『日本医史学雑誌』第47巻第2号、2001年6月、261-281頁。

50) 京都大学図書館富士川文庫、請求記号 キ/9、登録番号 184230。

此挙也、一片南鏡優數卷可發一笑一笑。蘇門胡兆新題」⁵¹⁾とある。

この書跡を見ても秀逸な書家の一人であったと言えるであろう。

その後、長崎来航の唐船主として書道関係の記録を残した人物に江泰交、江大來、字泰交、号稼圃がいる。「江稼圃肖像」として知られるものが、筑前の絵師斎藤秋圃⁵²⁾の文化五年（嘉慶13、1808）作で、長崎県立長崎図書館に所蔵され「江稼圃と江芸閣の賛」⁵³⁾があり、その部分江稼圃の像⁵⁴⁾を右に示した。



江稼圃（生卒年不詳）諱大來、字泰交・連山、号稼圃で江蘇蘇州の人とされ、文化年間の末から天保年間にかけて長崎に来航し、江戸時代後期の長崎に来航した清人画家としても知られる。⁵⁵⁾

大田南畝が長崎へ幕府の公務で赴いた際の書簡の文化元年（嘉慶9、1804）十二月十六日付に、「當年入津唐人頭立候もの計名前別紙入御覧候。此中に九番船江泰交と申もの、書画宜候由に付、絹地遣し置候。」⁵⁶⁾と、江泰交の長崎来航と、彼が書画に通じていたことを記している。この時、江泰交は文化元年（嘉慶9、1797）の子九番船の船主張秋琴の財副として来航していたことは次のようである。⁵⁷⁾

子九番船 皆吉船 船主張秋琴 財副江泰交⁵⁸⁾

と見られる。

51) 郭秀梅「清医胡兆新の来日記録と業績——長崎における一八〇三～一八〇五年の活動（二）」『日本医史学雑誌』第47巻第2号、2001年6月、266頁参照。

52) 魚里洋一「斎藤秋圃研究史と町絵師雑感」、福岡県立美術館編『特別展——筑前四大画家の時代——斎藤秋圃と筑前の絵師たち』福岡県立美術館、2002年1月、69-71頁。

53) 福岡県立美術館編『特別展——筑前四大画家の時代——斎藤秋圃と筑前の絵師たち』12、73頁。

54) 「江稼圃肖像」、福岡県立美術館編『特別展——筑前四大画家の時代——斎藤秋圃と筑前の絵師たち』12頁。

55) 渋谷区立松濤美術館編『橋本コレクション 中国の絵画——来舶画人——』渋谷区立松濤美術館、1986年、109頁。

56) 濱田義一郎編『大田南畝全集』第19巻、岩波書店、1989年3月、128頁。

57) 濱田義一郎編『大田南畝全集』第19巻、129頁。

58) 濱田義一郎編『大田南畝全集』第19巻、129頁。

大田南畝の十二月二十六日付の書簡には、「子九番船江泰交と申候は落第之書生にて書画を善く致し候」⁵⁹⁾とあり、ついで文化二年二月十五日付には、「江泰交 号稼圃 落第生之由。書画妙也。絹地に蘭を頼申候、山水も頼置候」⁶⁰⁾と見られる。大田南畝は、江泰交、稼圃に絹地に蘭と山水の絵を依頼している。

文化二年二月二日に大田南畝は、唐館こと唐人屋敷での戯劇を見物に行った際に江泰交こと稼圃を見かけ、『瓊浦雜綴』に「江泰交、江大來、字泰交、号稼圃を見しが、大きな漢也。鬚もうるはしくみゆる」⁶¹⁾とその容貌を記している。

文化五年（嘉慶13, 1808）辰九番船 船主沈九霞 江泰交⁶²⁾

江稼圃は文化五年の辰九番船の船主として沈九霞とともに来航していた。

江戸時代後期において文人画家として知られる田能村竹田の文化十年（1813）脱稿し、天保五年（1834）における刻本の『山中人饒舌』二巻の下巻に、

己巳歳江大來稼圃者至、稼圃學問文章出弟芸閣右、蓋亦落第人。工山水、排慕自喜、但覺乏清潤致耳。⁶³⁾

とあるように、山水画が巧であったとされる江稼圃であるが。その弟芸閣も長崎に来航していた。

江芸閣の長崎来航に関しては、徳田武氏の「江芸閣と日本文人交流年表」⁶⁴⁾に詳しいが、長崎貿易の関係資料に江芸閣の長崎来航は以下のように知られる。

文政二年（1819）二月二十四日	卯1番船	船主
文政五年六月十八日	午2番船	財副 在留船主譚竹庵
文政五年十二月十五日	午6番船	船主
文政七年正月八日	未1番船	船主

59) 濱田義一郎編『大田南畝全集』第19巻、135頁。

60) 濱田義一郎編『大田南畝全集』第19巻、149頁。

61) 濱田義一郎編『大田南畝全集』第8巻、岩波書店、1986年4月、515頁。

62) 古賀十二郎『長崎画史彙伝』大正堂書店、1983年11月、522頁。

63) 早川純三郎編『田能村竹田全集』國文名著刊行會、1916年5月初版、1935年10月三版、例言4頁、152-153頁。

64) 徳田武『近世日中文人交流史の研究』研文出版、2004年11月、262-325頁。

文政七年七月五日	申3番船	船主
文政八年六月六日	酉3番船	脇船主 在留船主沈綺泉
文政九年四月十九日	戌1番船	財副 在留船主夏雨村
文政十年閏六月三日	亥2番船	船主
文政十年十二月八日	亥10番船	在留船主 財副鈕梧亭
文政十二年二月八日	子8番船	船主
天保元年六月十三日	寅1番船	脇船主 在留沈秋屏
天保元年十二月十九日	寅9番船	在留船主 脇船主鈕梧亭
天保二年(1831)十二月十四日	卯2番船	在留船主 脇船主沈耘穀 ⁶⁵⁾

とあるように、江芸閣は長崎貿易の記録だけでも十二年間に13度も記録を残している。

仙台の画家である菅井梅関は文化十年(1813)頃から長崎に滞在して、多くの文人と交流を深めたが、長崎で江稼圃に師事したとされている。⁶⁶⁾ その菅井梅関が文化十

二年(1815)に長崎を一時離れるときに来泊清人や長崎在住の人々と詩画を寄せ書きした作品が、文政元年(嘉慶23、1818年)の荒木君瞻画、金井莎邨賛の「梅關高士送別會之圖」である。⁶⁷⁾

同図の上左には、来泊清人二名が日本人の書法を眺めている場面が描かれている(左拡大図参照)。おそらく日本人の書法に、中国人からの意見をもとめるつもりで、書法交流が行われていた珍しい絵画である。



65) 大庭脩編『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳——近世日中交渉史料集——』関西大学東西学術研究所資料集刊19、関西大学出版部、1974年3月、9-12頁。

66) 大林昭雄『菅井梅関全傳』ギャラリー大林、1986年8月、144-151頁。

67) 仙台市博物館編『特別展図録 江戸の旅 たどる道、えがかれる風景』仙台市博物館、2012年9月、69頁。
荒木君瞻画、金井莎邨賛の「梅關高士送別會之圖」、松岡まり江編『百花繚乱列島——江戸諸国絵師めぐり——』千葉市立美術館、2018年4月、207頁。

「江戸期の日中アートが結ぶ」『讀賣新聞』2019年5月30日、大阪版夕刊、3頁。

またこの時期の唐人と江戸時代の人々との交流に関して、唐権氏に成果⁶⁸⁾があり参考になる。

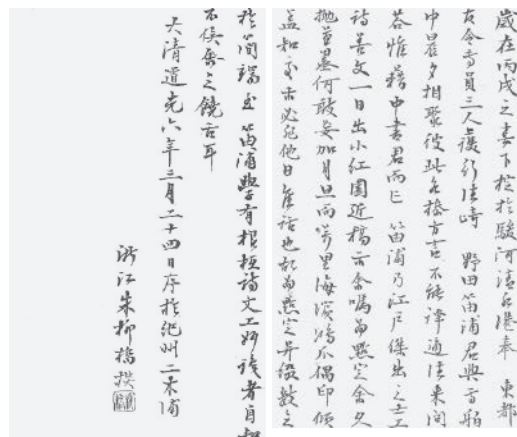
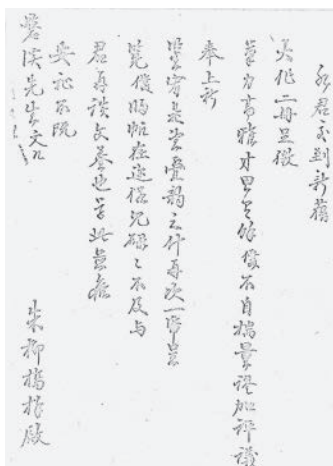
文化末年から文政年間にかけ長崎に来航した唐船主朱柳橋がいる。その来航は次のようである。

文政二年（嘉慶25、1819） 卯6番船 船主朱鑑池 朱柳橋

文政七年（道光4、1824） 申2番船 船主朱鑑池 朱柳橋

文政八年（道光5、1825） 酉8番船 在留船主劉景筠 財副朱柳橋⁶⁹⁾

この数年間に朱柳橋は、書法に関係する記録を残している。朱柳橋の書法は、田中謙二・松浦章編『文政九年遠州漂着得泰船資料——江戸時代漂着唐船資料集二——』⁷⁰⁾に収録された野田笛浦の自著『海紅園小稿』に以下のように見られる。



68) 唐権「長崎歴史文化博物館蔵『書翰集』について」、武内恵美子編『近世日本と楽の諸相』京都市立芸術大学、日本伝統音楽研究センター報告12、2019年3月、201-220頁。

「長崎は東アジア文化交流の中心」、『長崎新聞』2019年8月26日、10頁、唐権氏の報告をもとに来船清人がテーマで、唐権氏が江戸中期以降に来航した江稼圃、江芸閣等の族譜を発見されたことが紹介されている。

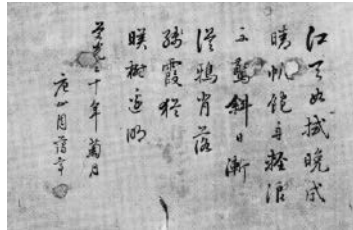
69) 大庭脩編『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳——近世日中交渉史料集——』9-11頁。

70) 田中謙二・松浦章編『文政九年遠州漂着得泰船資料——江戸時代漂着唐船資料集二——』関西大学東西学術研究所資料集刊13-2、関西大学出版部、1986年3月、306-307頁。

右は文政九年（1826）の正月に静岡県の大井川河口付近に漂着した長崎への貿易船得泰船の財副であった朱柳橋が、漂着地から長崎への得泰船の曳航に際して尽力した日本側の野田笛浦が自著『海紅園小稿』の稿本へ朱柳橋が寄せた序文である。⁷¹⁾ 野田笛浦が自著の出版に際して、漂流の長崎への護送に際しての数箇月にわたる接触から、朱柳林に一筆を求め、それを自著に挿入したのであった。このことから朱柳橋の書跡が日本の書籍に残ることとなった。

E) 天保時期の長崎来航唐人の書法

江戸時代の後期に、父子二代にわたって長崎に来航した船主に周藹亭がいる。文化七年（嘉慶15、1810）に17歳で長崎に来航して以来、弘化2年（1845）に長崎で54歳で逝去するまで四



十年近い長崎貿易に人生をささげた船主である。⁷²⁾

その周藹亭書法が知られ、「唐船図」とされる絵画に賛を寄せている。⁷³⁾ 道光二十年菊月とあるから1840年で日本の天保十一年に当たり、陰暦の九月に認めたものであろう。周藹亭は長崎の記録によれば、天保十年（道光19、1839）十二月二十八日に来航してから弘化二年（道光25、1845）に長崎に逝去するまで、長崎の唐人屋敷に滞在していたようである。⁷⁴⁾ その長崎滞在中に認めたものであろう。

F) 日本の“いろは仮名”を学んだ長崎来航唐人

長崎来航唐船主が来日して残した書法の書跡は上記のように見られるが、中には日本の仮名書きを覚えて書写した唐人もいた。橘春暉『北窓瑣談』後編巻二に、

寛政の初に、長崎に毎度渡り来りし孟涵九といふ唐人は、日本のかなをよく書覚へ、和歌、

71) 田中謙二・松浦章編『文政九年遠州漂着得泰船資料——江戸時代漂着唐船資料集二——』関西大学東西学術研究所資料集刊13-2、関西大学出版部、1986年3月、306-307頁。

72) 松浦章『清代海外貿易史の研究』朋友書店、2002年1月、238-243、251-254頁。

73) 渋谷区立松濤美術館編『特別展 橋本コレクション 中国の絵画——来舶画人——』97頁。

74) 大庭脩編『『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳——近世日中交渉史料集——』14-15頁。

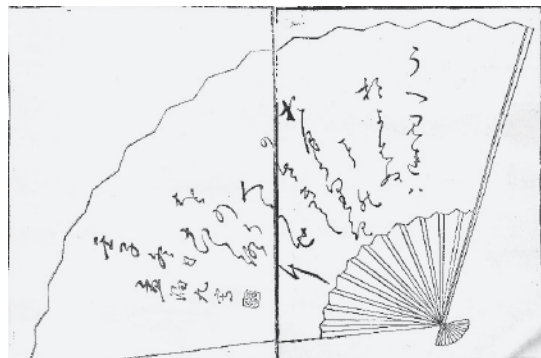
俳諧、狂歌の類を少しづつは作り覚えたり。和書をも読覚え、和語をも大抵はよくす。⁷⁵⁾

寛政年間の頃に長崎に来航していた孟涵九は、日本の仮名書きを覚えたとされる。孟涵九は、享和三年（嘉慶8、1803）王氏番外船の船主としての来航が知られる。⁷⁶⁾

孟涵九は、『長崎名勝圖繪』巻二下、南邊之部、唐館に、

孟涵九は名は世燾、字は涵九といふ。これもまた浙江乍浦の人なり。…寛政のころ長崎の館中にありて日本のいろは仮名を學びて古歌など臨模し書を乞ふ者あれば専らに書き與へけり。⁷⁷⁾

とある。孟涵九は諱が世燾で字は涵九であり、浙江乍浦の人であった。孟涵九がいろは仮名を書いている図と、その作品が『長崎名勝圖繪』に残されている。⁷⁸⁾



さらに寛政十一年（嘉慶四、1799）に刊行された中川忠英編『清俗紀聞』の中川忠英の跋文

75) 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成 第二期15』吉川弘文館、1974年8月、303頁。

76) 大庭脩編『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳——近世日中交渉史料集——』8頁。

77) 長崎史談會編『長崎名勝圖繪』長崎史談會、1931年4月、243頁。

78) 長崎史談會編『長崎名勝圖繪』長崎史談會、「孟涵九假名書」239頁。扇面の仮名書に「壬子日孟涵九写」（同書、240-241頁）とあり、壬子は寛政四年（乾隆57、1792）の作品と思われる。

に、同書制作の清国側協力者の最初に、「孟世燾」の名が見える。⁷⁹⁾

このように孟涵九は、来日して「いろは仮名」を習得した数少ない唐人であったろう。

G) 長崎来航唐人の書法とその受容形態

天明三年（乾隆48、1783）に生まれ、弘化四年（道光27、1847）に没した小山田与清の『松屋叢話』巻二に「秦其馨が書法、世にすぐれし話」に、中国書法の求道のために、長崎に赴いて唐人から学んだ事蹟が記されている。

波多野源蔵^{ウヅマサノ マ サカ} 秦 其馨は、号を星池とも、菊如斎ともいひけり。手かくわざを好て、はじめ細井九臯が門にまなぶ。祖父某も書法を好て、九臯が父の細井広沢が門人なりければ、そのゆゑをもて九臯にはしたがひつる也。九臯身まかり後は。東江源鱗、関其寧等が門に立いりとひはかりしに、なほ西蕃^{カラクニ}の書法にしかざるをながきつつ、十年あまりを過せしに、時ありて長崎におもむきしが、貢舶^{カラビト}の異人徐荷舟、劉培原などにむつびて、はじめてからくにの真跡をさとり得たり。さるに此ノ二唐人等がおなじ里なる、姑蘇人胡兆新といへるが書、こよなうすぐれたりとて、それが真帖^{カキマキ}もて、其馨に附属^{アタヘ}たり。これより其馨が書法日々月々にすすみて、今はをさをさよにならびなし。其馨常にいへらく、今の手かき人ともすれば、晉唐宋明の古榻本^{フルキスリマキ}を本則としてならひ得れど、おほかたは千臨百摹せし法帖にして、筆法の真面目をみることあたはず。さては古法をならひ得ん事おぼつかならずや。己は今の清人の真帖^{カラヒト}によりてただちにこれをまなぶ。その筆者いにしへ人にあらずといへども、おのづからいにしへの遺風を存して、はるかに榻本^{スリマキ}にまされるふしあり。かくて清人の書法を得て後、晉唐にさかのばらんも、又かたからしとて、古榻本にくれまどへ輩をぞわらひける。⁸⁰⁾

江戸後期の書家として知られる秦星池⁸¹⁾は、細井九臯⁸²⁾やその父細井廣澤⁸³⁾等に学ぶが、中国の書法が第一と考え、長崎に到り、来航していた徐荷舟や劉培原などと接触して中国書法を

79) 孫伯醇・村上一弥編『清俗記聞』1、東洋文庫62、平凡社、1966年3月初版、1994年10月初版10刷、153頁。

80) 日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成 第二期2』吉川弘文館、1973年12月、40-41頁。

81) 長澤規矩也監修・長澤孝三編『改定増補 漢文學者總覧』汲古書院、2011年10月、354頁。

82) 長澤規矩也監修・長澤孝三編『改定増補 漢文學者總覧』396頁。

83) 長澤規矩也監修・長澤孝三編『改定増補 漢文學者總覧』396頁。

学んだが、さらに彼等の教示で胡兆新の書を学んで新境地を開いたとされる。

徐荷舟は文化六年（嘉慶14、1809）には長崎に来航し⁸⁴⁾、劉培原も文化六年、七、八、九、十、十一、十二、十四年、文政三、四年まで来航していた。⁸⁵⁾ 秦星池が徐荷舟や劉培原と接触したのは文化六年頃と思われる。胡兆新は先に触れたように唐醫としても知られたが、書法においても優れていたとして、これら長崎来航の唐船船主等から、江戸時代の書家達は接触して、中国人の真跡を学んだり、入手しようと努力したのであった。

4 小結

戦乱の少ない平安な時代になり、江戸時代の人々は文化的なことごとに関心を高めて言ったが、そのなかで一つの潮流として書道関係の文化的なものに興味を持たれた。書道もその重要な一つであった。伝統的な書法に対して、長崎に来航する唐船が舶載する中国書法に関する書籍とりわけ書道手本として盛んに利用された、法帖、集帖、単帖、拓本なども中国から長崎にもたらされ、高価な輸入品に対して比較的廉価な日本製の模刻本も流通している。⁸⁶⁾

これに対して、長崎に通商のために来航する中国商人と接触して直接中国の書法を学ぼうとした人々がいた。通商のために来航する商人は全て高度な書法を会得した人々では無かったが、なかには日本書家を満足させる書法を会得したものたちがいたのである。それらの中国船主等の一端が上記した人々であったと言える。その様子的一端が「長崎におもむきしが、貢舶の異人^{カラビト}徐荷舟、劉培原などにむつびて、はじめてからくにの真跡をさとり得たり」と長崎に赴き、唐船の船主等の長崎来航の中国人より、直接その真跡を見たり、得たりして中国書法を習得したのであった。

これまで長崎の通商を通じて来航した中国画家、画人には注目されてきた⁸⁷⁾が、高度な書法を持つ人物に関しては看過されている。中国人の真跡を通じて、“唐様書道”を習得しようとした、ある種の江戸時代における中国文化受容の一形態と言えるであろう。

84) 長崎市立博物館編『長崎市立博物館資料目録 文書資料編』長崎市立博物館、1989年3月、258頁。

85) 長崎市立博物館編『長崎市立博物館資料目録 文書資料編』長崎市立博物館、1989年3月、258-254頁。
大庭脩編『唐船進港回棹録 島原本唐人風説書 割符留帳——近世日中交渉史料集——』8-10頁。

86) 松浦章「江戸時代における王羲之書跡の舶載と普及」、『或問』第33号、2018年6月、1-12頁。

87) 渋谷区立松濤美術館編『特別展 橋本コレクション 中国の絵画——来舶画人——』などがあげられる。